

玉 畹 梵 芳 傳

熊 谷 宣 夫

一

玉畹梵芳の傳は僧として延寶傳燈錄第二十六(佛教全書三四四頁)、本朝高僧傳卷第三十八(佛教全書五二七頁)、上村觀光氏著五山詩僧傳(二頁)、畫人として古畫備考卷九(增訂本卷上二九八頁以下)に收録せられてその輪廓を知るが、何れにも其の年表上の確定的な位置は示されない。古畫備考には根本史料として義堂周信(嘉慶二年寂一三八八)の空華集、瑞溪周鳳(文明五年寂一四七三)の臥雲日件錄等より引く。此等の文獻に加ふるに義堂周信の空華日工集、その他同時代たる五山僧の詩文集の涉獵を以て、又玉畹梵芳自身の著語ある詩軸の遺例あるを以て、其の傳を點綴せんとする處の此の一小論文の企圖に多少の結果を持來し得れば幸である。

臥雲日件錄寶徳元年(一四四九)閏十月四日條(續史籍集覽第三冊同抜尤一、四七頁)

今晨快晴。午後睡。座書棚下。見閑古紙十餘枚。就中有玉畹(之□□)曰。應永龍集庚子四月廿二日。早出輦寺。借宿林下。次早讀金剛經。至于若爲人輕賤。(是人)先世罪業。(應墮惡道)以今世人輕賤。故。先世罪業。即爲消滅處。而銘肝。喜甚。拙者

玉 畹 梵 芳 傳

七十三歳。於其中間。經幾般事。莫如今日之喜矣。乃易服披緇。佛前發誓曰。不可今後再出頭叢林。苟違所誓。則於當生必做白癩。身後永墮泥犁。无有出期也。自書紳以爲終身之誠也。遂作一偈。奉呈鹿苑侍几。并同門諸公。揄然是幸。眷梵芳頓首。經過七十餘年事。寵辱悲懽夢一場。若得山中安樂地。看雲日々快移床。書籍中。收拾得者也。予曰。然則玉畹呈嚴中一定□乎。玉畹爲勝定相公所寵遇。然□達釣旨。赴江時。所誓者也。今見之不能无感。錄以供後人觀覽耳。

(註) 古畫備考及延寶傳燈錄所載に據つて訂正(側點)補遺(括弧)す

瑞溪周鳳が壽徳東軒に在つて玉畹の書を見出し感慨を以て誌す。鹿苑侍几即ち嚴中周噩(正長元年一四二八寂)へ宛て、勝定相公即ち將軍義持の知遇に背いて近江に隱遁する動機を備さに具する處である。今知り得る梵芳の生涯に關する最後の記年はこの「應永龍集庚子」即ち同二十七年(一四二〇)であり時に「拙者七十三歳」とする。彼自らその公的生活に終焉を劃し、「後往江州、結庵山間、歷年而寂」(延寶傳燈錄)と傳ふるのみなる此の轉期はおそらくその死にも等しき重大

な感銘を以てその傳に錄せられるを思ふ。寂年を傳へず纔かに建仁寺志住持籍次に

七十八世

玉畹梵芳 嗣春屋菴
三月十二日化

と見え、その月日のみを知り、又西村兼文の京都府下畫家墳墓記

(畫論大觀卷中)
(二〇四四頁)に

玉畹梵芳 東山南禪寺後山

としてその塔所を注する。

かく應永二十七年壽七十三を以て姑らく梵芳の活動期の最下限とし、逆算して貞和四年(一三四八)の誕生を以て彼の生涯の書に第一頁を誌される。しかしながら其の生地も姓氏も或は沙喝たりし僧院生活の初期をも知り得ない。

空華日工集(續史籍集覽第三冊)應安三年(一二七〇)八月十三日條

師姪梵芳來_レ自_二東勝_一。出_二近作數首_一。一則歸田詠一百五十六韻。

効_二古詩體_一。難_レ濫用_二奇字_一。往々不_レ可_レ讀也。

と見えて、かく義堂周信に依つて梵芳二十三歳の生活が初めて史上に描出せられる。時に義堂は鎌倉瑞泉寺に在つて梵芳又おなじく鎌倉葛西谷東勝寺に在りしものとせられる。

(註) 鎌倉五山記(續群書類從第二十七輯下三九二頁)關東十刹三位青龍山東勝寺開山無及とす。即ち蘭溪道隆の嗣無及德詮である。大日本地名辭典に依れば開山退耕行勇とする。

當時の同寺住持に就いては空華集(五山文學全集第二輯)に

次_レ韵答_二東勝渭大清十章之作_一(三一頁)

誓古天住_二東勝_一山門疏(五三〇頁)

穎中山住_二東勝_一山門疏(山名青龍)(五二〇頁)

賀_二東勝天章_一(二六三頁)

中巖圓月(永和元年(一三七五)寂)の東海一漚集(五山文學全集第二輯)に

香林遠西堂住_二相之東勝_一諸山疏(五六頁)

大清渭西堂住_二相之東勝_一江湖疏并敍(五八頁)

等を見るが、大清宗渭(明德三年(一三九一)寂)の如き庶幾く推し得て而かも定め難い。即ち梵芳の師承に關しては、其の東勝に在りし事實に關係なく、傳に謂ふ處の春屋妙葩(嘉慶元年(一三八七)寂)に稟法すとして、前述「師姪梵芳」の師は義堂自身を意味する後註であり、妙葩が義堂とおなじく夢窓疎石(觀應二年(一三五二)寂)の法嗣たる關係に解せられる。この應安三年以前妙葩は延文二年(一二五七)等持寺、康安元年(一二六一)臨川寺、更に阿波光勝院、貞治三年(一二六四)伏見大光明寺、同年天龍寺と居住し、應安二年(一二六九)南禪寺山門の事に因つて丹後雲門菴に退居する。蓋し梵芳の師事は此の京洛に於て爲されしものと推せられる。尙ほ鎌倉五山記建長寺條(續群書類從第二十(七輯下三八二頁)龍興院知覺普明國師。諱妙葩。號春屋。嗣法夢窓。八月十三日示寂。南禪寺龍華菴。相國寺大智院。天龍寺金剛院。山城寶幢寺以上。

又建長寺住持歷代(佛家人名辭)に五十四世と見え、後永徳元年(一二三八)執權足利氏滿に依て建長寺に請せられたるに赴かず、此の建長寺住持を早き時代と考へ得れば、梵芳の隨從は鎌倉に於ても可能となる事を附記するに止まる。

空華日工集(同略集三、一八頁)、應安六年(一三三三)十一月十七日條

爲梵芳侍者。求席上披詩藁。凡百六十首。就中八十首點且改。

芳本字玉桂。今改玉琬。

義堂は管領上杉氏の建つる鎌倉城北の報恩寺に請せられて居り、梵芳亦鎌倉に在る事おそらくは前述應安三年に續く。而して此兩度の記事の行間にはその僧として生活に加ふるに作詩に對しての彫心鏤骨の勞を讀む。又かの空華集の多くの彼に關する文獻は此の鎌倉に在りし時代のものありと解し得て、梵芳の畫蘭に就いてその詩作と共に知る消息を獲やう。その字を改めて玉琬と云ふ。古劍妙快(寂年不明)の了幻集道號(五山文學全集第三輯二三頁)に

曾種瑤瑜帶月耕。藍田秀色待秋成。禪心一片清如水。聲價難酬十五城。

玉琬

と見ゆるは梵芳その人の爲と思はる。又空華集に

題贈玉桂上人詩卷(五〇五頁)

無等藏主及諸友。贈答玉桂芳上人之什。敘曰千里同風。無等

出以示予。且索著語。(下略)

として見ゆる處、この應安六年の記述に參照せられ、玉桂上人として敬稱を附せらるゝ事に、梵芳が既に諸友間に推重せらるゝを知る。(註) 無等藏主は空華集に無等說(四二六頁)「福山與藏主、中岩師字之曰無等、(下略)」又「題無等說卷尾」(五〇五頁)に述べられ、圓覺七十一世無等梵與と推せられる。尙ほ空華集に「題芳上人扇」の一絶(一三四頁)あるが當時芳字を名にもつ僧多く、何れか決定し得ない。

かく義堂との交友に依つて梵芳の在鎌倉の時代を劃しうるが、慈恩寺詩(後出)中「寓舍海東經十霜」と見えこの應安、永和間十年

玉琬 梵芳傳

の滞在である。次いで義堂が康暦元年(一三七九)建仁寺に住するに及び空華日工集の記述は京都へ移り、而かも梵芳に關し二三記事を見出す。即ち梵芳亦京都に在つて、彼の着語ある多くの詩軸を遺す應永時代に先立つ時期として考へられる。

空華日工集(略集三、二八頁)、康暦三年(一三八二)五月一日條。

大事將發。三次未_レ知_レ所由矣。余謂是必薄福所_レ感。退事決矣。告_レ伴衆如_レ西山。出門轉向_レ東山。抵_レ于無量壽院。即修_レ狀遣_レ僧告_レ退國師。少頃梵芳來告。乃知小師童中等。新掛搭。厭_レ寺欲_レ火。寺衆疑氷釋。余聞即削_レ度藉并簿。

この事件に就いて未詳なるも、當時義堂等持寺に在り、國師即ち春屋妙葩は僧錄司たり又南禪寺に在つて、梵芳は此の間の幹旋に當るを知る。

空華日工集康暦三年永德改元十二月二十三日條(略集三、三九頁)

余赴_レ等持院雪庭忌齋。前遊_レ法華堂。主人元章舉和遊送_レ中竺二偈曰。等持三昧力。竺土大仙心。余曰止々。只箇一聯。說得十分也。芳玉琬袖_レ茗而來。且出_レ看_レ山聯句詩一百韻者。而求_レ點兼改。且點仍跋_レ于其尾。又改_レ看_レ字作_レ觀。

是に亦、梵芳が義堂にその詩の添削を請ひ、その鎌倉以來の交遊同じく藝文にある關係を見る。

(註) 早春懷_レ法華元章。(一〇四頁)

送_レ芳林郁首座歸_レ相陽。(一〇三頁)

次韻餅紅白梅二首。奉_レ呈_レ等持不遷法華元章。以謝_レ兩枝之頒。兼致_レ聯輝之慶。(一六四頁)

寄_レ金剛郁元章。(一二五頁)

次ノ韻贈支藏主歸京兼簡江州金剛元章。(二六九頁)
次ノ韻因講孟蘭盆經疏答法華元章。(二七七頁)
和清溪和尚兼簡元章。(二八六頁)
以上空華集に元章周郁との授贈多きを知り、前文中の法華堂、元章に相當する。

空華日工集嘉慶元年(一三八七)十一月二日條(略集四、三一頁)

赴上生院。時龍華院玉林萬宗各袖茗來訪。玉晚知二老至。亦

追而來會。聯句數十字。仍喚院中悅岩古心覺藏主而同遊。

義堂は當時「在常在光院兼管上生院」と註せられ、上生、龍華、俱に南禪寺塔頭である。今梵芳の住院を知り得ない。

即ち同集至德三年(一三八六)二月一日條(略集四、九頁)

謝龍華院玉林西堂上堂。(下略)

同年七月十四日條(略集四、二三頁)

悅岩玉林占心萬宗來遊、盖惜余之退院也。

と見ゆるに續く關係である。此時は義堂「在南禪」とし前記の人々を見出す。

(註) 空華集に據れば玉林に關しては

戲和無外早菊稚松二詠并敘(八〇〇頁)中「余一夕病臥南陽山谷舍。有剝啄者。吾伯玉林堂上無外禪師也。(中略)余遂命毛顓子。步玉林。二詠韻言松菊主人志云」

贈方無外住玉林。(二六三頁)

と見え方無外の稱とせられる。更に

次ノ韻答清川春江玉林三友見賞水仙及蘭之什。(四二頁)

次ノ韻贈曇芳玉林二上人隨模堂遠赴瑞應之行二首(五七頁)

次ノ韻建仁古劍和尚與玉林唱和什。(二九〇頁)

用韻贈玉林西堂歸住豐萬壽。(二九〇頁)

玉岡唱和詩序(三四三頁)中「右詩龜山玉岡上人作也。頃者其友曰琨、玉林者。」玉林說(四七六頁)中「海東上人珙者。字曰玉林。」題瑾知客悼師偈後(五六頁)中「吾無涯法兄之徒。玉林瑾。其人歟」方無外の他に琨玉林、珙玉林あるを知る。古劍妙快建仁入院永德三年(一三八三)にして第三第四の題は日工集所出の人と推せられるが尙ほ後考に俟ちたい。

悅巖に關しては

詠伯仲梅并敘(五〇頁)中「余戶保壽冬。得梅栽兩株於悅岩之圃。」

和酬听悅岩。(二二三頁)

次ノ韻謝听上人見序(二二七頁)

追和無外重陽前一日詩寄忻悅岩成集之後。(二六〇頁)

余以己未上巳日偕悅岩實夫諸友赴溫泉。(二六七頁)

華山字序(三四四頁)中「悅岩叟一夕過余石屏。」

又日工集康曆元年(一三七九)四月三日條に悅岩の名見え、同年己未の干支で第五の題に參考せられる。華山字序は應安三祀(一三七〇)の年記あり、いづれも同一人らしく、義堂の交友の親しき關係より玉林を方無外、之を听悅岩と解し得やう。

萬宗に關しては

送淵萬宗住慧林。(二九八頁)

萬宗說(四一頁)中「遠州傑藏主將歸也」

題萬宗侍者春雨詩後而追悼之。(四一頁)

序二萬宗哀詞(三四八頁)中「前龜谷無礙之徒。曰一者。乃有志者也。朋友畏敬曰萬宗。」

後二者は日工集應安元年(一三六八)二月三日條に見ゆる一萬宗であり、茲に參考せらるゝは淵萬宗であらう。

古心に關しては

古心說、爲鏡禪人。(四三九頁)

覺藏主と別人と考へて此の説も參考せらる。至德三年七月十四日條の占心は古心と解せられるが、覺藏主は未詳である。

梵芳に關する記事は之を最後として、空華日工集の主人公義堂周信は嘉慶二年(一三八八)に寂し、以後斯くの如く梵芳の消息を傳ふ

る文獻を見ない。

即ち應永年間に入り梵芳自身の着語ある詩軸の遺存、或はその記録に據つて、かの應永二十七年に到る後半期の足跡を追蹤するに出で得ない。

應永十五年（一四〇八）瓢鮎圖詩

同 二五年（一四一八）三益齋圖敍、慈恩寺詩

同 二六年（一四一九）江天遠意圖詩、墨梅詩

之等詩軸の年表上の配置の理由に就いては本誌第四號拙論文（九頁、以下）、其の敍文詩句に就いては同上附表玉畹梵芳欄を參考せられたく、但、前述論文に逸し或は正すべき二三の補遺を諒されたい。

高士觀梅圖（前山久吉氏藏品）は贊畫別紙、

畫は傳周文筆なれど疑問とせられ、贊は嚴中周

噩、仲方圓伊（應永二〇年（一四一三）寂）謙岩原沖（應永二八年（一四二一）寂）

惟肖得巖（永享六年（一四三四年）七五歲）太白眞玄（應永二二年（一四一五）寂）

と共に梵芳を存するが、紙面の荒頽著しく着筆原初の儘と考へ得ない程度である。併しその史料的な意義を認め得る。梵芳の題詩は次の如く

印「知足軒」

短筇烏帽步遅々。隨_レ後

折來梅一枝。絳雪受_レ風

飄數片。幽禽偷_レ眼蝶無_レ知

散人 梵芳 印「玉齋」印「少林」

一 高士觀梅圖贊

同 十七年（一四一〇）芭蕉夜雨圖詩

同 二〇年（一四一三）溪陰小築圖詩、夕佳樓圖詩、高士觀梅圖詩

同 二二年（一四一五）柴門新月圖敍及詩

同 二三年（一四一六）碧潭和尚像贊

玉畹梵芳傳

贊者中仲方圓伊の歿年最も早く、夫を標準として應永年間の詩畫軸の一例と考へ梵芳の一足跡とする。（挿圖第一、參照）

碧潭和尚肖像贊（古畫備考卷上二九九頁）はその年記及び款識を擧げ

應永丙申十月如意珠日焚香拜讚梵芳謹書

とする。碧潭周皎（應安七年寂一三七四）は夢窓疎石の法嗣、梵芳はその法姪たる關係にある。

鎌倉花谷慈恩寺詩（古畫備考卷上二九九頁）は「前南禪、玉畹梵芳」として

寓ニ含海東ニ經ニ十霜一。未レ遊ニ花谷ニ但聞レ名。今觀ニ諸老詩中景一。似レ遂ニ昔年幽討情一。

と見え、此の詩序は新編鎌倉志に所録せられ

相之治。直ニ東南之交一。岡連谷盤。突而起。拗而窪。其曰ニ華谷一。

兼ニ奧與曠一而有レ之。寺額慈恩。初桂堂聞公開而基レ之。大年椿公繼而輪レ之與レ之。（下略）

應永戊戌暮之春 九華山人釋聖瑞序

と在るものである。聖瑞一曇（寂年不明）は復菴宗己（延文二年寂一三五七）の法嗣、

圓覺八十四世、南禪百六世、建長寺靈芝軒に隱退すと傳へる。

梵芳の一絶は懷舊の詩であり、若年尠くとも康暦三年以前十年を鎌倉に寓舍すとし、この作ある應永二十五年に當つては既に前南禪たるを知られる。

かく應永年間に於ける彼の史料は其の仕事に關して而かも自身の直接關與の痕を残す。然して生活の敘述とすれば斷片的であるが、此らの史料間に窺ひ得る梵芳の姿は隱然當時の叢林に重きを爲すものに他ならない。

かの瓢鮎圖に於て、おそらく應永の詩軸中、最も公式な着語の形

式をとる圖贊に於て、大岳周崇（應永三〇年寂一四二三）の敘并詩に次いで第二位に着筆する事實はその意味を深うする。しかしそは禪僧間に在つて權力者たりし故なるを些かも見出し得ない。唯にその着語を殆んど應永の詩軸（末年と推定し得る初秋送人圖以下を除いて）に伴ひ、夫を恰も偶然ならざる條件として居る消息は、遂に梵芳の詩に能く書に又畫に深き傾倒を有つ側面に歸せざるを得ない。

一應に梵芳の禪林に於ける位置を顧れば、空華日工集應安六年十一月十七日條に「梵芳侍者」、空華集、余適訪玉畹芳書記閑房有レ偈次レ韻二首（一一八頁）に「玉畹芳書記」絶海中津（應永一二年寂一四〇五）の蕉堅稿、題玉畹外史扇（五山文學全集第二輯二二頁）に「玉畹外史」と見ゆ。この侍者、書記、或は外史とする時代は應永以前と推定せられる。應永に入つてその住院その地位は知り得ないが、前掲に據つて建仁寺七十八世及び傳に曰ふ南禪寺八十一世として五山に出世するを知られる。その時代は不明確であるが應永二十五年、前南禪たる事は慈恩寺詩に依つて明かである。又仲方圓伊は奇しくも建仁寺八十一世、南禪寺七十八世であり（佛家人名辭書に據る）建仁入院は應永十六年（一四〇九）であり、後南禪に遷ると傳へる。然らば梵芳建仁の董は同十六年以前であり、南禪住持は夫より遅れて同二十年前後と傳へらるゝを妥當とする。即ち、梵芳が尠くとも應永十六年以前に建仁に出世しての後多くの詩軸に着語を残す時期に五山僧間に長老として迎へらるる事を知る。

空華日工集に謂ふ處殆んど義堂周信との交渉の詩作に關するを以て終始し「一則歸田詠一百五十六韻」「求_ニ席上披_ニ詩藁_一。凡百六十首」「且出_ニ看山聯句一百韻者_一と云ふ。今彼のかゝる多くの詩を傳ふるを見ず寓目する處纔かに花上集中に次の十韻を編する。(續群書類從第九頁以下)花上集は文學契少年の編、周興彥龍(永正五年既寂一五〇八)の序あるもの、

竹逕掃雪

玉畹

萬竹低垂逕不開。瑤花隨_レ筭動成_レ堆。殷勤掃向黃昏月。初識清光照_ニ紫苔_一。

清泉濯足

世路紅塵十丈深。往來爲_レ客恨難_レ禁。自斟岩下漣漪碧。濯_レ足慚_ニ吾不_レ洗_レ心_一。

燒琴煮鶴

千秋怨入一盃羹。三尺爆揚絃外聲。莫_レ管人間殺風景。孤魂和_レ月落_ニ蓬瀛_一。

春江送別圖

春江底事氣如_レ秋。只爲_ニ送_レ人多_ニ別愁_一。風攪_ニ岸花歸棹急_一。羨看沙背一双鷗。

丹楓

楓柳秋深映_ニ翠巒_一。豈知青女染成_レ丹。昔年夢作南遊客。勝似吳江々上看。

槿花

槿花初發拂_ニ晨粧_一。一日榮衰樂不_レ長。世態於_レ人每如此。可_レ憐朝

玉畹梵芳傳

露借_ニ恩光_一。

也足軒

軒前脩竹綠婆々。玉立三竿不_レ用_レ多。好是滿山風雨夜。虛心相對亦無_レ他。

落梅曲圖

蓬萊烟客出_ニ琳宮_一。梅下橫吹倚_ニ晚風_一。只合_ニ暗香難_ニ落盡_一。孤根長托_ニ畫圖中_一。

江上夕陽

江上青山多_ニ夕陽_一。芙蓉點破碧波光。鷗邊不_レ待夜來月。何事扁舟歸意忙。

鷗

世故紛々機巧多。春江白鳥意如何。知渠沙際有餘地。細雨斜風投_ニ綠簑_一。

(註)「也足軒」一韵は本朝高僧傳に「大將軍義持源公。挹_ニ其風格_一。歸依特渥。強起住_ニ南禪_一。列刹欽_ニ高儀_一。晚構_ニ投老菴_一。識_ニ事而休_一。因有_ニ作日_一。」として收録。
「鷗」一韵は横川景三撰百人一首(續群書類第十二輯一一一頁)に收録。

猶は既に前章に舉げしもの或はその自畫贊の傳ふるもの以外、拾遺すれば延寶傳燈錄に一偈を求め出でらるゝのみに了はる。

觀音贊

聞思修入三摩地。東西南北普門開。咄。大士從入作來。かく詩僧としての彼の全容は邈として傳へ難き憾を遺し、論詩に疎き余に幾何の品隅をも許されない。しかし空華集に依れば

戲和_ニ詩答_ニ玉畹_一 (九二頁)

夜風颯々動巖扉。寒氣嚴於猛虎威。不謂隣菴貧道者。寄詩來覓禦寒衣。

余適訪玉晚芳書記閑房。有偈見謝次韻二首（前出）

禪起午窓香乍鎖。我來分榻話寥寥。未容袖却文章手。潛子才名聳百寮。

玉晚蘭殘露半銷。詩成一笑似參寥。老吾才拙難爲和。只合長留置衆寮。

和題蘭蕙同幅（同頁）

楚客何年解佩纓。至今淡墨尙餘芳。春風二月花如醉。笑汝偏醒在酒傍。

（註）「和題蘭蕙同幅」を古畫備考は「右題云々」とし詩後に書す。而して前二韻とは時と處の近く梵芳の畫蘭と思はしめる。

病中送詩藁還芳上人兼乞墨蘭。（二六三頁）

病夫只愛晝眠長。緊閉柴門臥竹房。敢把文章論得失。誤蒙珠玉問行藏。刪詩已閣宣尼筆。養性還尋華氏方。楚佩已遭風捲去。煩君重爲寫幽香。

此等の記述の適確なる時代を知り得ないが、日工集應安三年條に評して「効古詩體難澁用奇字往々不可讀也」とし以後記述康熙三年五月一日條を除いて梵芳の詩を添削せられ嘉慶元年條に至りて「玉晚知老至。亦追而來會。聯句數十字。仍喚院中悅岩古心覺藏主而同遊。」と曰ふに至るまで、蓋し若冠、貞和類聚祖苑聯芳集を編んで詩作に關する當時第一人者の觀ある義堂に親炙して、やがて最後に推重せらるゝ作域に到るを知る。乃ち「潛子才名聳百

寮」と云ひ「老吾才拙難爲和」と云ひ、寔梵芳に對する敬意を見る。然かも、此らの詩の含蓄は更に梵芳の生活を明確に描寫し、亦相通する友情を一味のユウモア或は沈潛の心情を帶びて道破する。第一の韻に梵芳は一箇の貧道者である。第二の韻にその僧房の寂しき生活を見る。第三韻以下梵芳の畫蘭に言及んで居り、最後に至つてはその畫蘭に對する義堂の愛好と尊敬とを明かに示す。即ちその詩を措くも玉晚の面目猶はその畫蘭に生くるを識る。

三

空華集中玉晚の畫蘭に關しては前述以外その贊詩を見出す。

蕙蘭（五頁）

蕙有何好。楚人采之。貴在爾德。不在爾姿。

蘭有何好。道人寫之。隱德弗耀。君子是儀。

玉簪之蘭。空華之贊。一研一醜。同幅同觀。

空華之詞。玉簪之蕙。一薰一蕕。十年同契。

蘭蕙（五一〇頁）

魯叟之操。楚人之詞。皆以蘭比君子有德不遇者。所以歎之也。噫苟有德矣。而不遇皆時也。於君子復何歎之有哉。

玉晚之作蕙也。半幅之間僅一蕙。而五六華也。而克與蘭兄爲儷矣。而復安用彼百畝之載也矣。

湘纍逝兮。遺佩參差。楚天杳兮。春草離々。魂兮歸來。莫怨清時。

疾風塵兮蕙草偃。小人出兮君子遠。嗟乎爾蕙也。毋爽盟於歲晚。

蘭香草也。而畫者能肖_レ厥形。不_レ能_レ發_レ其香。然則曰_レ蘭非邪。曰不_レ然。惟六根休復。以_レ眼嗅者。乃能聞_レ其香_一矣。非_二畫者咎_一也。

蘭似_二君子_一。蕙似_二士大夫_一。黃九此語。蓋爲_二君子少而士大夫多者_一發也。然至_レ觀_二其素有之性_一。君子士大夫皆具焉。豈可_下以_二少多_一優_中劣_上其品_上者耶。

世愛_レ蘭者。例愛_二其香_一也。獨余不_レ然也。愛_下其晦_二養孤芳_一。而不_レ爭_二先桃李之場_一也。

山谷以_レ蘭比_二君子_一。蕙比_二士大夫_一。而曰。大槩山林十蕙而一蘭也。此蓋蘭少而蕙多也。而今吾國之山林。蘭多而蕙少。則何哉。

(註) 右二題の詩文は畫蘭に關しての諸種のヒントを示して居り、すべてが玉腕に限らずとしても敢て再録する。

空華集中に云ふ處、梵芳を名指しては、墨蘭以外の繪事に及ばない。

他事ながら空華集に就いて見れば題詩は、蘭蕙圖以外、墨竹、墨梅、山水尤も多く、その畫人を拾遺すれば

走_レ筆贈_二畫僧惠_一、愚溪_一 (七八頁)

惠不_レ惠兮愚不_レ愚。筆端幻出萬形傳。明朝別後應_二相憶_一。萬里江山一幅圖。

墨竹二首 (八一頁) 中

渭川千畝只聞_レ名。相憶年年風浪生。多謝_レ幻_レ菴_レ如_レ幻筆。寫_レ眞贈_レ我兩三莖。

(註) 古畫備考愚溪淨慧和尚 (卷二九〇頁上) として所載、空華集の幻菴銘 (五五二頁)

序中「京萬壽鐵舟師之徒曰_レ慧、而扁_二乃居_一曰_二幻菴_一。詩中「是以道人、如何而住、道人爲_レ誰、曰_レ慧、愚溪」と見え慧愚溪と幻菴の同一人たるを知り、同時にその畫系は法脈に準して鐵舟に即するを憶ふ。

謝_二世宗遠寄_一秋雲冬雪小幅_一 (二九二頁)

三昧筆端圖畫開、白雲晴雪兩奇哉。那知紫陌黃塵底。置_二我青山碧水隈_一 (下略)

寄_二世宗遠_一 (二七九頁)

妙峰高壓百餘城。前世德雲今再生。古畫憶披三島景。新圖尙記五天名。 (下略)

(註) 古畫備考宗遠應世和尚 (卷二九六頁上) に關する記述がある。應安頃寂としこの二詩の相當する畫人として解せらる。

擬騷一章書_下懷_二歡上人_一詩後_上 (四頁) 中

道人哲者。戲筆效_二小米_一。幻_二雲樹半幅_一於卷首。

題_二參上人畫_一重求 (三二頁)

一双翡翠數莖蘆。楊柳垂絲燕影孤。更想道人三昧筆。一_二揮寒拾兩顛奴_一。

墨竹三首 (七九頁) 中

笑_レ岩笑把_二禿毛錐_一。爲_レ竹傳_レ眞作_二笑姿_一。未_レ審此君笑_二何事_一。笑吾題_二竹缺_一新詩。

(註) 跋_二上人歸田藥_一 (五〇九頁) 中「笑岩上人歸田藥詩二十五首。意圖句熟」と見え同一人、訴笑岩として考へらる。

畫竹爲_二西雲竹侍者_一題 (一二〇頁)

上人愛_レ竹自爲_レ名。故把_二琅玕_一淡寫_レ生。歲晚憶_レ君兼憶_レ竹。西雲菴外玉千莖。

この慧愚溪、世宗遠、哲道人、參上人、訴笑岩、竹西雲等の他、墨梅二首(二〇頁)中「多謝道人手。研煤寫素姿。」墨梅(七九頁)中「道人戲筆寫疎枝。便是西湖處士詩。」墨竹二首(一一五頁)中「借得筆端三昧力。春來又見一枝甦。」墨竹圖四首(一一九頁)中「道人落筆寫嬋娟。彷彿湘江暮雨天」等見え、詩文と共に僧の畫事に親しむ

雪瘦一窩竹。青濃八月春。祇應瀟洒甚。莫似漢中人。玉腕子
印 印

檀芝瑞風墨竹石として(卷上 三〇三頁)

印「知足軒」

雜俎竹六十年易狼則結實

(註) 此の款識は古畫備考

枯死。爰有下一種雖曰經六十年之又六十年不可死者

(卷上三〇一頁)畫史所出とするに庶幾いが「題」を「爲」とする。又檀芝瑞風の墨竹を傳玉腕子とする

非道人筆下有陰陽不測之地哉

遺例は Ars Asiatia XI に圖版あり。

玉腕子戲題

測之地一哉

→印 印 印

更に同書(卷上 三〇四頁)に、次記の贊と略圖を示す。

蕭條淺碧掃愁眉。一

(註) 之と同様の贊圖のもの相國寺に在れど、オリ

洗羣花富貴姿。如此

ジナルものか後考に俟

風流以何待。隣臺

ちたい。但し「隣」字は「瑤」に作る。

月白奏朱絲

玉腕子 印「玉腕」

かく墨竹に就いて記す。

遺品に依れば墨梅折技 (國華三二五所掲、贊に就いては本

誌第四號應永年間詩畫軸附表參照) 及び山水圖(國華四九所掲) 次記の自題ある

ものを傳梵芳筆とする。

事多く、夫等畫人中に在つて玉腕が鐵舟德濟と相並んで畫蘭に於て卓抜に記述せらるゝを見得て、而かも畫蘭に在ては他の名を冠せらるゝのを見得ない。

矮屋雲林塵

扁舟蘆荻灣

古畫備考には、玉腕の眞蹟として、(三〇〇頁)

漫然真有樂

夢不_レ落_二塵間_一

老衲玉腕題

→印「梵芳」→印「玉腕」

かく梵芳にアトリビウトせらるゝ墨竹、墨梅、山水あるを知るが、姑らく問題外に置く。即ち畫蘭に梵芳の本來を見んとするに前述の如き理由を考へ得る故である。

三 梵芳筆蘭蕙同芳圖

天一方。

と見ゆるのみである。而して自贊は遺品によれば

鹿王院藏品（圖版及挿圖第二參照）

百畝養花今已滋。雨餘淺碧

掠_二愁眉_一。只緣_二一點芳心在_一。不_レ羨

青松百尺姿 玉簪子芳題

奉_レ寄_二 →印 →印
「梵芳」「玉簪」

（國華より）

而してその墨蘭の自畫贊せらるゝもの通途である。空華集以外の

梵芳畫蘭に題するもの臥雲日伴錄長享二年戊申條（續史籍集覽に此年なく
古畫備考に據る、三〇頁）に

題_二玉腕蕙軸_一爲_二龜阜有芳_一作

花與_二春蘭_一兩有_レ芳。關_レ情水佩又風裳。鷓鴣鳴黑湘江雨。彼美人兮

玉腕梵芳傳

春源侍史一嘆_一

淺野侯藏品（挿圖第三參照）

印（不明）

獨愛斯花芬馥。不_レ屑_二

畱夷揭車_一。尼父今則

亡矣。瑟操尙洗淫哇。

樹蕙雖云三百畝。一

莖數花也奇。絃歌

可憫幽獨。瓊珮舞

風陸離 玉晚子

蘭蕙同芳圖上書 印「少林」

猶ほ所在不明ながら列舉の煩を許さるゝならば

雀帳北山隱

幽情堪自

聊得蕙花露

擬洗彼

玉簪子 印「玉晚」

造化小兒如忤人。故教荆棘與

蘭鄰。湘波日々秋風起。一

片孤忠憶楚臣 玉簪子 印「少林」 (原文左書)

印「知足軒」?

顏色雖云美。清香輸與蘭。

色薌元幻化。誰向物初觀。

玉晚子 印「梵芳」 印「玉晚」

參花風珮舞。貽影俯

湘波。獨芳在高有。無

由攀碧蘿 印「梵芳」 印「玉晚」

印「知足軒」

珮委湘江月。魂歸

楚水秋。爲誰呼小李。

着定寫風流

玉簪子 印「少林」

而して此等中井上氏入札のものや、好く、近衛公入札、五山詩僧傳所掲のものは、大倉集古館藏品(無賛、印「少林」)と共に參考に資せらるべき程度と云ふ。猶ほ古畫備考には探幽縮圖中より(三〇〇頁)

幽芳尋九畹。惟戀楚三閭。翡翠曾抽蕾。碧花闌雪餘。散人梵芳

との一詩を拾遺する。しかし、花上集の十韻その他にも此等の題賛を見出さず、圖の疑問あるものに對して文獻的側面より確證し得ない憾を存する。

更に枝葉ながら梵芳の畫軸に於ける印影考に及ぶ。その名梵芳の方形朱文二字印及びその號玉晚の方形白文二字印二種は、唯個々に就いて比較研究を要するのみである。

(註) 玉晚の二字印二種は「玉晚」及び「玉簪」として區別し注記する。(應永詩畫軸附表中柴門新月圖序の「玉晚」は「玉簪」と訂正する)使用例については本誌第八號芭蕉夜雨圖考(一四頁)を參考せられたい。

畫蘭に多く見出さるる方形白文二字印「少林」の典據は未だその

傳に關連する記述を見ない。空華日工集應安五年（一三七三）三月二十三日條（略集二、五頁）

少林來遊。出_二伯仲梅和什三章_一。有_下暗香疎影連仙後。世上久無_二鐘子期_一之句_上。

同年二月十三日條（略集二、三頁）、永和改元十一月廿五日條（略集二、三九頁）に

も少林の名見え、空華集の

次_レ韻畱_二少林侍者_一（二八頁）

戲答_二春少林寶墨之間_一（四三頁）

戲寄_二少林藏主_一（八二頁）

次_レ韻畱_二夢堂兼簡_一無外少林二伯仲（二五八頁）

贈_二智知客_一題_二無外少林偈後_一（五一二頁）

に一致するものあつて、春少林即ち圓覺六十二世建長八十三世たる少林智春であらう。猶ほ日工集永徳二年（一三八二）十月八日條（略集三、六八頁）

過_二三會院_一。繁少林舉復見心免日本使後作偈_上云。（下略）

とあつて、梵芳の同時代人に春少林の他相國寺十四世周繁少林あることも知る。

（註）東海一漚集（六七頁）鉄舟德濟の閑浮集（五山文學全集第二輯一三頁）此山妙在（永和二年寂）の若木集（同上）に道號と思はる「少林」を見出す。又空華集（五五頁）夜座聽雨有_レ懷白雲少林幽石無外二難禪師次韻二首中の夫は解し難い。

少林は初祖以來禪宗に親しき名稱であり多く使用せられ、寺名としても當時に空華集に依れば

寄_二題少林寺立雪方丈_一（七〇頁）

更に日工集康暦元年四月十日條（略集三、七頁）

玉腕梵芳傳

南禪少林院主蘭春谷來。說少林本爲西澗別業。平氏亡後。歸_二我先師明極手_一。實天龍國師之力也。

と見え、後者は渡來僧たる西澗士曇及び明極楚俊に關し、殊に明極の塔所として知らる、南禪寺の子院がある。梵芳との關係あればおそらく此處に存すと推せられる。

古畫備考に依れば、本朝畫史が雜家として「山林」を立てしを、印より「少林」と訂して梵芳條に收録するに到る。（卷_上三九九頁）而して現存の作品に在つては、前述鹿王院藏品と相並んで代表的作品と考へらる、淺野侯藏品に捺せられて梵芳の使用せる事實は肯定せられるが、猶ほ前述の如き考ふべき餘地を残す。

又淺野侯藏品に於ける關防は現在知らる、唯一の印影で、長方形上白文下朱文の二字印と思はれ、上字木扇を明かにするのみで姑らく考へ得ない。

關防としては長方形、白文三字印「知足軒」は通途である。

（註）國華三三五墨梅について青衿子解説には「知足畫」とするが、通途に解せらるゝ「知足軒」を取る。

即ち、花上集中の一韻「也足軒」と同音と解せられ、南禪の子院と推せらる。類例を求むれば無極志玄（延文四年寂）は知足と號すと云ひ、又一菴一鱗（應永十四年寂）に也足の稱ありとす。而かも後者の行狀（續群書類第九輯六八七頁）に依ればその師龍山德見（延文三年寂）が「在龜山丈室一示寂。昇歸東山。寔全身於知足之塔。」とし又、伯林國立博物館藏文殊大士畫像江西龍派（文安三年寂）贊尾に

永享已未季冬

比丘龍派焚香于知足内院^一

→印「釋氏龍派」

と見え、何れも梵芳に時代近く、一菴一鱗建仁六十七世、南禪五十七世、江西龍派建仁百五十四世、南禪百四十四世である。此らの關係より大體に知足軒即ち也足軒であり、而も梵芳個人の號に非してその住院の稱と解せられ、おそらく前述の人々に共通するものと思ふ。

今還つて梵芳の畫蘭に直面する。義堂周信以來の高き評價を以てすれば確かに數多きその名を僭する遺品は淘汰せらるべきであり、現在史料の意義を超えて藝術品として推重せらるるものは纔かに二、即ち前述鹿王院藏品と淺野侯藏品である。前者に就ては國寶全集第七輯解説、後者に就いては章多子（國華三八四）樂之軒脇本氏（世界美術全集十六集）の解説あり、何れにも訓へらるゝ處多きに基いて暫らく説を爲さんとする。

後來、玉畹の畫評を爲すもの翰林五鳳集卷四十一（佛教全書八五三頁）所輯、天隱龍澤（明應九年一五〇〇寂）の一詩を嚆矢とする。

玉畹和尚畫蘭

畫系留名明雪窓。墨蘭天下稱無雙。高標超古玉翁筆。風珮參差對楚江。

おそらく、玉畹の畫蘭が僧普明即ち雪窓に學ぶとする定説の根據を成す。空華集に蘭蕙圖六首（八頁）中一韻に

二八

（國華より）

四 雪 窓 筆 蘭 石 圖

山谷今何

去。雪、幽些

不來。顯

乎能解事。

幽豔一揮開。

と見え、文

の黃山谷と

相並んで畫

の雪窓を舉

げる。又日

工集（略集二、

三月四日。

浴子伊豆

熱海（中略）

應安七年甲

寅也。無二

日。（中略）

近代益蘭明

雪窓弟子則

浩雪江峰項

雲日本人也。

（註）無二に

就ては空華

集中

鹿苑方丈窓前牡丹花戲次^二無^二韻^一（二〇頁）

溫泉旅店奉^レ謝^二南山^一無^二和尚袖^レ茶垂^レ訪^二首^一（八一頁）

送^二及^レ贈^二之^一兼簡^二鰲峰^一無^二禪師^一（一五四頁）

一、無^二住^二清見^一江湖疏、俗呼^二關寺^一者（五二二頁）

一、無^二住^二駿川承元^一江湖道舊^二疏^一（五一六頁）

序^二萬宗哀詞^一（三四八頁）中「天鑑糾成一卷。將^レ贈^二其友無^二公^一」

を收め、その人あるを知り、此の記事は第二の題に時を一致するものであらう。

五 鐵舟筆蘭石圖摹本

同じく至徳二年（一三八五）正月廿九日條（略集四）

赴^二上府之招^一。國師大清相山泊余。拈^レ關得^二雪、蘭、畫大香合等^一。

應安七年條は記述曖昧の點あれど畫蘭雪窓に日本人弟子ありと云ふ如く解せられ、至徳二年條は明かに雪窓畫の存在を意味する。

國寶全集國華解說に栢子庭を擧げるが、未だその畫蘭に好例を見ず、淺野侯藏品墨石菖（國華四〇七所掲）を知るのみである。雪窓畫蘭は、御物四幅聯幀（國華四二四所掲）淺野侯藏品二幅（國華四〇〇及四二四所掲）佐倉、

玉 嘯 梵 芳 傳

伊能氏藏品ありと聞く。蓋し玉嘯の畫蘭は殊に淺野侯橫幅（^{参照}第四）

の如きに庶幾きを知り、其の系統たるを肯定せらる。しかし、彼の構圖の大に比しては、此のいづれも所謂「半幅之間僅一莖。而五六華也。云々」との單化せられた表現であり、彼にある風露の環境の意識は之なく唯蘭たるのみを示す。

茲に玉嘯に較^レ先ずる同時代人に鐵舟德濟あつて又畫蘭に名を留むる事に顧みられる。空華集に

鐵舟蘭二首（八頁）

吾愛鐵舟老。能^レ詩能說^レ禪。世人不^レ識。空把^二墨蘭^一傳。（一首略）

鐵舟蒲萄二首（十頁）（詩略）

鐵舟和尚蘭二首（一一五頁）

鐵舟老人稱^二風顛^一。湖隱同^レ名擬^レ拍^レ肩。遊戲神通人不^レ識。只今世有^二墨蘭傳^一。

道人談笑墨淋漓。澹^二寫幽芳^一寄^二所思^一。日莫湘江風浪作。哀吟腸斷楚臣詞。

爲^二春雷谷^一題^二鐵舟蘭竹^一。（二七五頁）中

老禪遊戲筆如^レ神。書畫双奇稱^二絕倫^一。草聖追^二回懷素駕^一。蘭花邈^二得屈平真^一。雲根雨濕湖山曉。竹色烟藏楚水春。隻屐已歸^二西土去^一。披^レ圖三些淚沾^レ巾。

と見え、既にその人なくその畫に對して哀挽を唱ふ。その詩書畫禪に秀れ而も「世人不^レ識」とする隱逸の生活態度をも敍する。夢窓疎石の嗣として梵芳の伯にして法脈近く、その時代も明德年間寂と

云ふ。又義堂を中にする梵芳との關係に

會瑞光鐵舟師（二三頁）

寄二靈江師一（二三四頁）

(註) 靈江師は閻浮集(三一頁)靈江山居韻十首ありて或は鐵舟かと考へらる。

との空華集の記述も参照せられる。遺品として纔かに墨蘭（國華七七

(中川文庫より)

所掲）或は本朝畫纂所載（挿圖第五參照）のものを知るのみ。之等に依れば玉腕に比しより多く雪窓の風を追ひながら、その簡素の體は一層であり玉腕に近きを知り、畫系として鐵舟と玉腕の親近な關係はおそらくに無視し得ない。そは雪窓に對して海彼岸の隔りを感じ、鐵舟は同じく叢林に生うるものと云ひ得やう。

翰林五鳳集卷八（一九八頁）に據れば

子昂蘭

一夢雪溪雙鬢霜。
王堂畫靜寫孤芳。
前朝盛事消磨盡。
九畹春風古意長。

瑞溪

瑞溪

又

金臺學士宋王孫。寫出江南野谷村。二月雜花飛盡後。幽芳獨媚向黃昏。

惟肖

即ち瑞溪周鳳、惟肖得巖（永享六年一四三四七十五才）の二詩に依つて、當時趙子昂の畫蘭ある事を知る。その畫風は今知り得ないまでも、同族たる趙子固の水仙圖卷（清朝内府舊藏）の夫を聯想せしめられる。

今、故潛光中川先生の教示せられた此の水仙圖卷を想起する。細勁の勾勒をもつてその一花、その一葉を克明に描出し、葉の翻轉をその表裏の墨の濃淡に依つて示し、明かに叢生の態を寫照して亂れざる靜かな趣致をもつ。此の凝視、此の描法の刻鏤の下に滲むものは視に於ける眞實性の追求である。（挿圖第六參照）

かゝる様式は梵芳に於て採られて居ない。それは當時の宋元畫の受容の態度一般でもある。しかし、梵芳に系統付けうべき雪窓に於い

ては如何。その單調な水墨の畫蘭には猶ほ豊かな感性を盛り、かの凝視の下に出づる餘韻を残す。かくしてこの側面の傳統は海彼岸の繪畫の特色である。確かに敢て援引する趙子固の例を以て、即ち夫は雪窓に在つて先立ち、梵芳或は我が水墨畫にはその側面の傳統を缺き、茲に兩者區別さるべき一線あるを思ふ。

玉 腕 梵 芳 傳

六 趙子固筆水仙圖卷

又此の點に關して參考せらるゝは、國寶全集解説に指摘せらるる如く、當時の蘭その他梅竹等に對する愛好が文學的側面よりの刺戟に誘導せられた事實である。前述の如く黃山谷に淵由し、五山僧の詩文に枚舉に遑なき多くの例を残す。蘭に對する題詩を措いて文に求めても、東海一漚集の「神山移蘭記」(九八頁)「文明軒雜談」(一〇八頁)龍湫周澤(嘉慶二年寂)の隨得集「植蘭并序」(五山文學全集第二輯五七頁)或は仲方圓伊の懶室漫稿(五山文學全集第三輯六頁)「墨蘭詩軸序」等を見出し得る。而かもその文字上の遊戲に止まらざる事は、義堂或は龍湫の例に採つて明かであらう。空華集

二月廿夜大風達旦。空華叟力疾下床。訊梅蘭二盆花皆無恙矣。喜而作詩兼謝中心大岳之訪。(四二頁)(詩略)

に顧みてその愛の深さを知る。隨得集に謂ふ處

余遊山林。偶得蘭於蓬艾之間。一幹一花。而其香有餘焉。諒是王者之瑞也。

とし、その愛好は梅竹等を超へて、稀有にして貴重とするを讀む。蓋し、僧等の畫事が蘭竹梅等を對象としてその生活に不可分な觀照を有つ。此の傾向によつて梵芳の畫蘭がその對看よりも心情に即し形象を單化し而も内容的統一の緊密な表現を成す契機を解し得る。同時に畫蘭の品格としての要求はその畫手の又一層に人としての完成さに俟つ故も知られやう。

更に類推に役立つ一事實を擧ぐるならば、空華日工集應安三年八

月四日條（略集一、
五三頁）

余在石屏。山中諸公遊歸。整侍者求改送行詩。余以其俗甚。請別作來。因話諸公曰。今時僧詩。皆俗樣也。學高僧詩最好。官樣富貴金玉文章衣冠高名等弊尤多。弊則必跡生。跡生則必改。復古高僧之風可也。

と見え、後來五山に於ける「東坡山谷味噌醬油」の桶を既に警めてゐる。繪畫に於いても亦かゝる弊なしとせず、その繁盛と共に、やがて専門的、職業的とならんとする時代である。茲に在つて、梵芳の畫蘭は空華集に謳はるゝ處であり、今その柔き筆觸にして而も拘泥の痕なく、特に上方に伸び伸びたその筆致に半幅の間に自由な姿を示し、その感銘は明朗である。蓋し病義堂が墨蘭を乞ふの消息も十分に首肯せられる。脇本氏がその解説に雪窓に比して氷藍の譽ありとせらるゝのも、此の一層統一的な表現、自由な形象の把握、畫家の心情に即しての境地を暗示する意味に於て考へられ、義堂の頌に（前出）

蕙有_二何好_一。楚人采_レ之。貴在_二爾德_一。不在_二爾姿_一。

蘭有_二何好_一。道人寫_レ之。隱德弗_レ耀。君子是儀。

と云ふ處に深く顧みられ、その主題たる蘭の他の梅竹に比して一層の價值を唱はれ玉座を占むるは、聽て玉腕の畫蘭そのものの當時の繪畫に於ける位置に他ならない。それを成し得たるは時代と共にその人なる事を思はざるを得ない。

足利期の水墨畫の發展は蓋し玉腕を一つの古典として殘し發展し去る。しかし殆んど同時代に鐵舟を見出すのみで後來かゝる型のか

ゝる高さの繪畫を見ない。唯、大雅或は海彼岸に於いては僧石濤に主題を同くして比肩すべき作品ありと聞くのみである。

四

今、禪宗の海彼岸より傳へられて、人々の殊に僧となれる人の精神に反映し透徹せる核心的な想念に觸れ得るならば、禪僧としての梵芳傳は遙かに深さを加へて刻出し得たであらう。しかし斯る本質的な尙その根ざす處遠きに在る問題に就いて些かも語り得ないものである。

唯、打坐專念の曹洞に對して先づ其の淵叢を海東鎌倉の地に形成した臨濟はその特色としてあらゆる文化に關心を示し、勿論その郷土たる宋元に流れ出づるものに限られるが、その僧達に多様の生活様式を採る傾向を見る。

云ふ迄もなく蘭溪道隆、無學祖元の先蹤以來宋元との交渉深きに淵由する。而して無學祖元、高峰顯日の派下夢窓疎石出でて、一世の宗師として京洛に迎へられ、その徒は何れも京洛の叢林に住して巨匠として遇せられる。春屋妙葩を請しては至徳元年（一三八四）相國寺を建て、義堂周信が同三年（一三八六）南禪寺に住すれば同寺を五山第一に陞す。

かくして、夢窓派下の勝利と應永年間以降の五山の文物の繁榮とは不可分に結び付く。而して海東鎌倉に於ける宋元との直下に結合せる文化は京洛に吸収せられ、更に劃一的な型に入らんとする。義堂の詩、絶海中津の書共に一時代を劃すると云ふもこの轉機に在る。

玉腕梵芳がかゝる環境に育まれ、特にその兩者の影響は著しきを知られる。而かも僧として彼以前の人々の如く、必しも恵まれざる境遇に海彼岸の文物に對する憧憬は蓋し應永以後の僧等に比して知識以前の生活の指導的な感銘として働く。この意味では、かの靈淵默菴等の前足利期の畫家と云はるべき型の藝術であり、これは一層に其自身に纏まるものであらう。

繰り返すまでもなく、僧としての榮達は人後に落つるものではなかつた。而かも自身に於て夫を否定する程に内省的である。或は當時空華日工集に見ゆる如く、大覺派と佛光派の確執、又春屋と龍湫の不和等義堂の憂とする處、同じく一點反省的な素因を梵芳の心境に投ずるものがあつたらう。かゝる内面的な生活態度は必然に實踐的であるよりも觀照的ならしめられる。而かも此の觀照的な生活態度は筆にして即ち其の畫蘭である。この觀照的な心境に到達するに、かの日工集の詩作の評の如く、刻鏤苦澁のものあるを憶ふ。おそらく内面的な葛藤を突破つて出た觀照的な境地はその畫蘭の如き自由さであり明るさである。云ひ得るならばその畫蘭に彼の完成せられた自畫像を觀る。自畫に、「只緣二點芳心在。不_レ美青松百尺姿」と云ふ處、又彼の性格に外ならない。

かくて「性在三隱逸、沈退守志」(本朝高僧傳)「天性隱逸。而深嫌_二出世_一」(延寶傳燈錄)と云はるゝ處であり、應永廿七年の退居の事實は彼自身の内面的必然の歸結と感ぜられる。空華集に

蘭二首(一二頁)中

獨醒人去_二何許_一。空濶楚天一涯。擬_レ收_二遺珮_一爲_レ贈。風逆孤舟路危。

王 腕 梵 芳 傳

との詠は遷して芳玉腕の運命である。おそらく江州山林の看雲移床は最も自由な彼に相應しい生活であり、そはかの伸々と花をつけ、萎るべき時に枯れる蘭蕙の自然の境涯たるを想うて已む。拙くも玉腕梵芳の傳を綴り了り、その畫蘭を掲げてその生きたる容を傳へうれば喜は之に過ぎない。

附記 聞く所によれば眞珠庵普巖宗賢所錄の畫傳に

玉宿諱梵芳。又稱_二梵腕幽芳_一。又號_二竹鶴老人_一。春屋公門弟也。好_二蘭竹石菖蒲_一。師_二明雪窓之筆法_一。

とある。同畫傳については後素談叢卷二(藝苑叢書五九頁以下)に見ゆる如く、畫人傳として異說多きを立つるもの、この所傳に關して未考の儘に掲げる。又佛家人名辭書には建仁寺住持歷代百三十二世に梅嶺梵芳なる名を録するが、時代は下ると思はれ同一人と考へ得ない。但同名か或は誤傳かと疑はるゝが決定する資料的根據に欠く。

南禪寺に懶侍者(懶は蘭の音通)として蘭の愛好者ありとの傳も梵芳を想はせながら、當時の畫蘭流行の一例と解しうるに止まる。疑問のまゝ、以上の事項を注記する。

鹿王院藏品は圖版に於ては上邊を空白の部分纔かながら切れることを御斷りする。

淺野家藏品は紙本墨畫 竪一〇六、五糎幅三四、五糎 挂幅。

挿圖第五鐵舟墨蘭は本朝畫纂の古版本に據るもので、増補本には所掲せられないものである。縦二尺五寸許横一尺四寸と註せられる。